



角川文庫

— 14 —

愛と認識との出發

倉田百三



角川書店



角川文庫

愛と認識との出發



昭和二十五年六月三十日 初版發行
昭和二十六年四月三十日 八版發行

定價 九十圓

著作者 倉田 百三

發行者 角川 源義

印刷者 小泉 輝章
東京都文京區戸崎町七一

發行所

東京都千代田區富士見町一ノ二〇
振替 東京一九五二〇八〇

角川書店

落丁・亂丁本はお取替へ致します

小泉印刷・製本

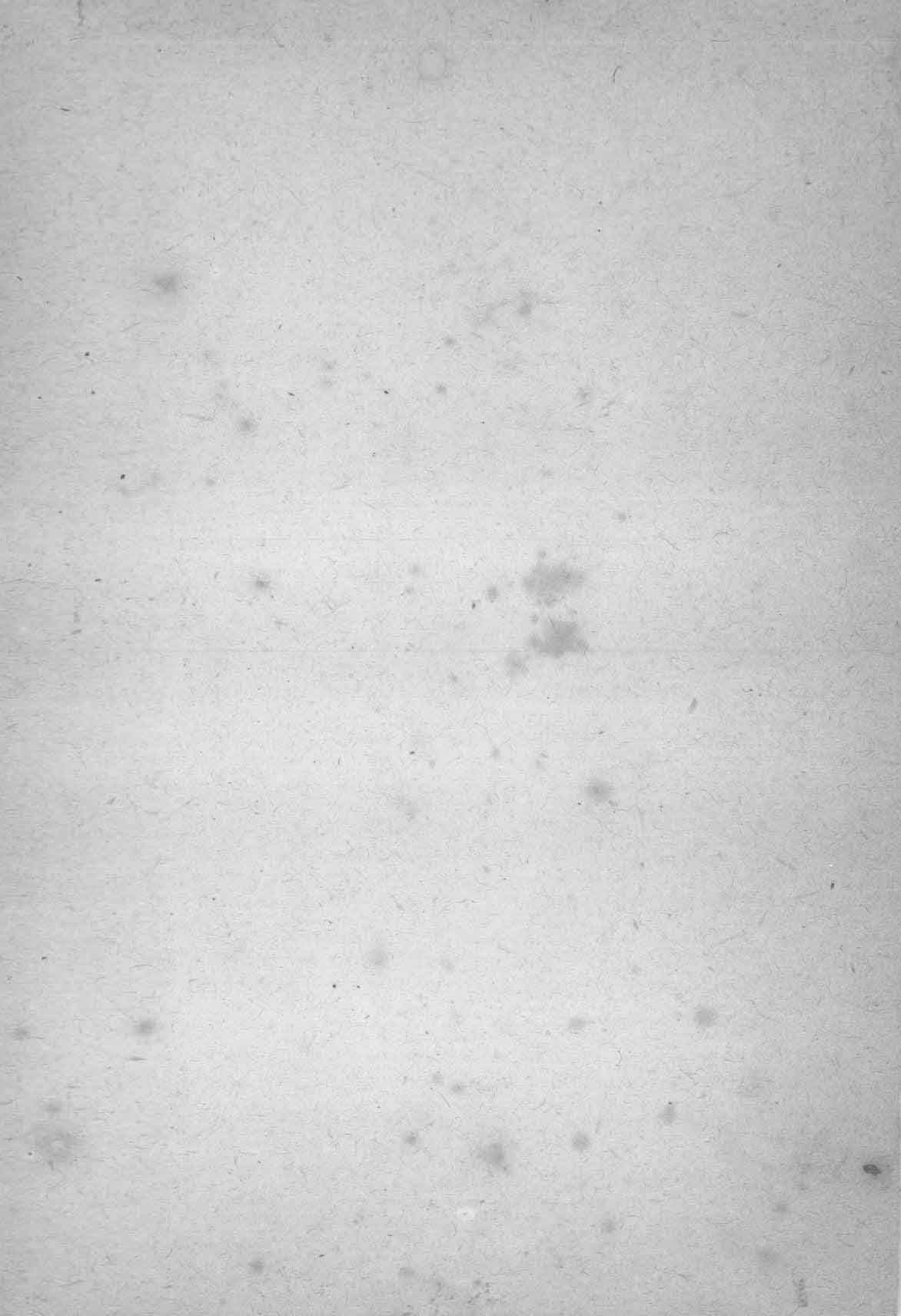
愛と認識との出發

倉田百三



角川文庫

14



此の書を後れて來たる青年に贈る

倉田百三より西田幾多郎博士への手紙

ありますが自重して 淋しい深い秋の海のや
うな哲学者になつて下さい。たゞ書日齋
と塾生として讀書三昧の日を送るばかり
でなく時々は人生の底に横はる寂寞な
堪へかねて月暗き野をうろついて物言
はぬ石を抱いて涙を垂れ、時は雪のし
つとりと積った灯の色の凍へるやうな夜祇
園の色街に美しいおとなしい妓を呼んで

* を引きちぎつて未知の京大講師西田氏に書を送つたが、大正元年の夏京都で二人のめぐりあひが行はれた。この手紙は百三が歸京して、西田氏と逢へた感動を丈餘の巻紙に書き送つた一部である。

艶やかな黒髪は顔を埋めて眠ったりす
るやうな哲学者は先生になつて頂きた
い。或は電燈の燦として輝やく大橋の
上をぼんやり物思ひつゝ歩みながら突然
襤褸を身はまたふた乞食の粗大な手
から食を乞はれて、我知らずポケットから銀
貨を掴み出して與へ其の傍書日斎は
遁れかへつて暗然として書を閑くやうな
哲学者であつて欲しい。出来る事なら
優れた小説や詩を創作する事の出来

若き哲學者西田氏の「善の研究」は當時の思想界に大きな影響をあたへた。一高在學中の百三の若き靈魂は初めてめざめ、「愛と認識との出發」が生まれたことは本書45頁にあきらかである。大學ノート *

兄弟よ、我爾曹に新らしき誠を書き贈るに非ず。即ち始より爾曹の有てる舊き誠なり。此の舊き誠は始より爾曹が聞きし所の道なり。然ど我が爾曹に書き贈る所はまた新しき誠なり。

——約翰第一書第二章より——

版を改むるに際して

此の書は發行以來あまねく、人生と眞理とを愛する青年層の人々に讀まれて、數多くの版を重ね、今も猶ほあわただしい世相の動きにも、自己本然の眞實の姿を失ふまいとする、心深く、清き若き人々の間に讀まれつづけてゐる。

私はその生命の春に目ざめて、人生の探究に出發したる首途にある青年達には此の書が正しく、示唆に富める手引きとなり得るであらうことを今も信じてゐる。私が恃みを持つのは思想的內容そのものよりも人生に對する態度である。如何なる態度を以て生き行くべきか、その誠と力とラディカルな自由性とは今の青年達に感染して決して間違ひないであらう。此の書はたとひ思想的に未熟と誤謬とを含んでゐる場合にも、純一ならぬ輕雜な何ものをもインフェクトせぬであらう。私は反語とか諷刺とかの片鱗を以て論述を味はひつける、大家にも普通なレトリックさへ決して用ひなかつたのである。徹頭徹尾純一にして無雜な態度を守り得たことは此の書が若き人々に廣く讀まれるに際しての私のひとつの安心である。小さく賢く、淺く鋭く、程よく世事なれる今日の惡弊から青年達を防ぐのに役立つであらう。

7
此の書にはいはゆる唯物論的な思想は無い。一般的に云つて、社會性に對する考察が不足して居る。しかし生命に目ざめたる者は先づ自己の享けたるいのちの宇宙的意義におどろくことから初めねばならぬ。認識と愛と共存者への連關とは其處に源を發する時にのみ不落の根基を持ち得

るのである。社會共同態の觀念も我と汝と彼とをひとつの全體として、生を與ふる絶對に歸一せしむる基礎なくしては支へ難い。社會科學の前に生命の形而上學がなくてはならぬ。

此の書を出版してより已でに十五年を経てゐる。私の思想はその間に成長、推移し、生の歩みは深まり、人生の體驗は多様となつた。従つて今日此の書に盛られて居る通りの思想を持つては居ない。しかし私の人間と思想とのエレメントは依然として變りない。そして「たましひの發展」を重視する私は永久に青年たちが其處を通つて來ることの是非必要なところの感じ方、考へ方の經路を残して置きたいのである。けだし思想は生命が成長するために脱ぎ捨てて來なければならぬ殻皮である。しかしその殻皮を通らずに飛躍することは何人にもあたはぬ。青春時代には青春の被覆をまとうて居ねばならぬ。生命と認識と戀と善とに驚き、求め惱むのは青春の特質でなくてはならぬ。社會性と處世との配慮は稍後れて來るべきものであり、それが青春の夢を喰ひつくすことは惜しむべきである。世に屬くことと天につくこととの間には聖書のしるす如く越え難い溝がある。先づ天と生命とに關する思想と感情とに充ち／＼てその青春を生きよ。私が私の青春を回顧して悔いが無いのはそのためである。やがて世はその乾燥と平凡と猥雜との塵勞を以て、求めずとも諸君に押し寄せるであらうからである。

「常に大思想を以て生き、瑣末の事柄を輕視する慣はしを持て」とカルル・ヒルティは云つた。今の知識青年の社會的環境についての同情すべき諸條件を決して私は知らぬのではない。しかも私が依然としてこの語を推すのは瑣末な處世の配慮が結局青春を蝕み、氣魄を奪ひ、しかも物的にも、それらの輕視したよりも何等よきものをもたらさぬであらうことを知るからである。今日の世に處して、物的缺乏の中に偉大なる精神を保つ覺悟無くしては、精神的仕事にも、社會革命

にも従事することは出来ない。物乏しければこそ物にかかづらふのはつまらない。大燈の「肩あつて着ずといふ事なし」と云ひ、耶蘇の「これらのものは汝に加へられん」と云ふ、その覺悟を以て、その青春を天といふのちと認識と愛と倫理との、本質的に永遠なる思想、感情に没頭せよ。諸君の將來を偉大ならしむる源泉は依然としてここに在るのである。

今日世間の塵勞の中に大乘の信を得て生き、國民運動の社會的實踐に従ひつつある私は、それにもかかはらず、諸君の青春に悔いなくしめんためにこのアドヴァイスを呈するものである。

青春は短かい。寶石の如くにしてそれを惜しめ。俗卑と凡雜と低吝との苟くも之に入り込むことを拒み、その想ひを偉い^{おほ}ならしめ、その夢を清からしめよ。夢見ることを止めた時、その青春は終るのである。

序文

此書に收むるところは自分が今日迄に書いた感想及び論文の殆ど全部である。此の書の出版は自分にとつて二つの意味を持つてゐる。一は自分の青春の記念碑としてとあり、二は後れて來たる青春の心達への贈り物としてとある。自分は今自分の青年期を終らんとしつゝある。而して今や青春の「若さ」を葬むつて、年齢に關はりなき「永遠の若さ」を以て生きゆくことを今後の自分の志向となしてゐる。自分は自分の青春と別れを告げんと欲するに臨んで、實に無量の感慨に浸らずにはゐられない。自分は自分の青春に對して限りなき愛惜を感じる。そして勞ふ心地をさへ抑へる事が出來ない。自分の青春は實に眞面目で純熱で且つ勇敢であつた。そして苦惱と試煉とに充ちてゐた。そして自分は顧みてそれ等の苦惱と試煉との中から正しく生きゆく道を切り開いて、人間の靈魂の當に赴くべき方向に進みつゝあることを感じる。そして自分は自分がその青春の、そのやうにも烈しかつた動亂の中に在つて、自己の影を見失はないで、本道から外れないで來る事が出來たことを心から何者かの恵みと感じないではゐられないのである。自分は今自分の青春を埋葬して合掌し焼香したい敬虔な心持である。そして自分が青春を終はるまでに自分が觸れ合つて來た、自分を育てるに役立つてくれた——多少とも自分が傷つけてゐる所の——人に謝し其の幸福を祈らないではゐられない氣がする。自分の青春は又實に多くの過失に富んでゐたのである。自分は自分に後れて來たる青年が、自分の如く眞摯に、純熱に、勇敢に、若々し

く、しかし乍ら自分の如く過失をつくる事なく、従つて自分及び他人の運命を傷つけることなく、賢明に其の青春を過ごさんことを心から祈らないではゐられない。其等の過失は實に純なる「若さ」に伴ふものではあるが、しかしそれは一生の運命の決定的契機をつくる程重大なるものであり、其の過失の結果は實に永くして怖ろしいからである。現に自分は其の過失の報いから今なほ癒やさるゝ事を得ずして、不幸な境遇の中に生きてゐる。只自分は其の境遇の中に祝福を見出だす道の暗示を——それは自分の青春其のものが示唆したのであるが——かすか乍らも掴み得てゐる爲めに、今後の生活の希望を保つことが出来るのである。自分は其處に自分の過失を償ひ、生かし、否むしろ其の過失によつて一層完きものに近づく智慧を獲得する事が出来たと思つてゐる。此の書は其の過程の記録である。自分は此の書が後れて來たる青年に對して有益である事を信じないではゐられない。それは自分の青春がすぐれて美しく、完全であるからではなく、却つて多くの過失を具へてゐるからである。そして其の過失が償はれて——少くとも償ふ本道の上に立つて進みつゝあるからである。自分は此の書を後れて來たる青年に對して、今の自分が贈り得る最上の贈物である事を信じる。人が若し心を空しくして此の書を初めより終り迄讀むならば、きつと何ものかを得るであらう。其處には一個の若き靈魂が初めて目醒め、驚き、自己の前に置かれたるあらゆる生活の興件に對かつて、眞直ぐに、公けに、熱誠に働き掛け、憧がれ、疑ひ、悩やみ、又悦び、様々の體驗を経て、後に初めて愛と認識との指し示す本道に出でて進みゆき、遂ひに其等の興件を支配する法則及び其の法則の創造者に對する承認及び信順の意識の暗示に達する迄の、生の歩みの歴史がある。此の集に收むる文章は其の思索の成績に於て必ずしも非常にすぐれてゐるとは言はないが、其の文章の書かれた動機は、何れの一つもその表出の理由と衝動と

に充ちてゐないものはない。そして一つのものから次ぎのものへと推移する過程には必然的な體驗の連結がある。其の意味に於て眞に靈魂の成長の記録である。人は初めのものより、終りのものへと進むに従つて、次第に其の思索と體驗とが深められ、其の考へ方は多様に且つ質實となり、初めには裁いたものをも赦し、斥けたものをも攝り、曖昧なる内容は明確となり、次第に深く、大きく、且つ高くなり、其の終りに近きものは、もはや「恵み」の意識の影の隱見する所に迄達せんとしつゝあるの見出だすであらう。其意味に於ては、人はむしろ自分をあまりに早く老いすぎるとなすかも知れない程である。實際自分には壯年期と老年期と同時に來たやうな氣がしてゐる。それは必らずしも自分が緻密なる思索に堪へ得ざる頭腦の粗笨と潑刺たる體驗を支へ得ざる身體の病弱との爲めではなく、實に自分の如き運命を享けたる者、早き死を豫感せるものが、彼岸と調和との思慕に急ぐのは必然且つ當然なる事である。其意味に於て自分は「戀を失うた者の歩む道」より以後のものは、壯年期以後の人に對しても讀まるゝことを適當でないとは思はない。もとより此の書には、殊に其の初めの頃のものとは稚く、且つ若さに伴ふ銜氣と感傷とを可成りな程度迄含んでゐる。しかし乍ら自分は自分の青春の思ひ出を保存する爲めに可成りの羞恥を忍んで其れをそのまゝに残しておいた。其等の銜氣と感傷とはそれが眞摯にして本質的な稟性に裏付けられて居る時には青春の一つの愛すべき特色をつくるものである。實際自分は其等のものを全く缺ける青年を、青年として愛することは困難を感じる。又かなり目障りな外國語の使用等も學生としての氣分を保存する爲めに敢て其の儘にしておいた。「生命の認識的努力」は幼稚であり、學術的には認識論の入門に過ぎないけれども、其の頃の自分にとつては實に重要なものであり、此の文章を書いた頃の尊い思ひ出を愛惜する爲めにどうしても割愛する氣になれな

つた。且つ此の文章には一般の青年が其一生を哲學的思索に捧げない人といへども、必らず知つて置かなければならない程度の、認識論の最も本質的に重要な部分を悉く含んでゐるからである。そして自分が常に抱いてゐる、中學の課程に於て、自然科學を教ふる際に、認識論殊に唯心論的な認識論の入門を併はせて教へなければならぬと云ふ意見の實施の代用として役立つことを信じるからである。實際自分は中學の誤まれる教授法に依つて授けられたる自然科學の智識の、實在の説明としての不當の——其の正しき限界と範圍以上の——要求から解放せらるゝまでに、どんなに不必要な、しかも實に慘憺たる苦惱を経験したことだらう。自分は其の爲めに青春の精力の半ば以上を費したと云つてもいい。此の事たる、只中學に於て、自然科學の教師が、其の智識が實在の説明として、或一つの考へ方であつて、唯一のものではなく、他に多くの而して其の中には例へば唯心論の如く、全然反對の考へ方もあることを附加するだけの用意を持つてゐさへしたならば、免かるゝ、少くとも半減する事が出来たのである。そして恐らく私のみでなく、殆んどすべての青年が同じ苦惱を経験するであらうと思はないではゐられない。其の意味に於て自分の此の稚き一文はかなりの效果ある役目を果たすであらうと思つてゐる。また此の書にはかなり屢々同一思想の反復或ひは前後矛盾せる文章を含んでゐる。これは即ち自分が同一の問題を繰り返し、くりかへし種々の立場より眺め、考へ、究めんとせるため及び思索と體驗の進むに従つて、前には否定したものをも攝り容れ、或ひは前に肯定したものを、否定するに至つたためである。思想が必然的連絡を保つて成長してゆく過程を痕づけるものとして、かゝる反復と矛盾とは、避くべからざるものであるのみならず又その思索と體驗の眞摯なることを證するものであると思ふ。

此の書は青年として當に考ふべき重要な問題を悉く含んでゐると云つてもいい。即ち「善とは何ぞや」、「眞理とは何ぞや」、「友情とは何ぞや」、「戀愛とは何ぞや」、「性欲とは何ぞや」、「信仰とは何ぞや」等の問題を、たとひ決して解決し得ては居ないまでも、此等に關する最も本質的な考へ方を示してゐる。而して考へ方は或る意味に於て解決よりも重要なのである。一般に自分はこの書の學術的部分には持みを持つてゐない。殊に「隣人としての愛」より後は自分の興味は次第に哲學より離れ、随つて表現法も意識的に學術的用語を避けて、直接に「こゝろ」に訴へる如きものを選ぶに到つた。自分が此の書に於て最も持みを置いてゐる點は、人間が當に人間として考ふべき種々の重要な問題を提出しそれについての最も本質的な考へ方を示し、且つ人間の「こゝろ」の種々なるムードに就いて、深く、遠く、且つ懐かしく語り得てゐると信じる點にある。其等の心情の優しさに於て、種々の尊き「徳」に就いて語り得てゐると信じる點にある。自分は此の書が讀む人の心を善良に、素直に、誠實に且つ潤ほひに富めるものとならしむるに少しでも役立つことを祈るものである。一個の人間が如何に生きてゐるかは、善惡ともに他の共に生けるものゝ指針となる。其の意味に於て此の書は、其の青春の危険多き航路を終りたる水夫が、後れて來たる友船へ示す合圖である。自分は彼らの舟行の安らかならんことを心より願ふ。而して自分も亦愛と認識との指す方向に航路を定め、長き舟行の後終に彼岸に達せんことを念願するものである。がそれは恵みの導きなくしては遂げらるゝとは思へない。願はくば造りたるものゝ恵み、自分と及び、自分と共に造られたるものゝ上にゆたかならんことを。

(千九百二十一年一月十八日朝)

目次

憧憬——三之助の手紙

生命の認識的努力

異性の内に自己を見出さんとする心



Naturkindとして生きよ、……

自然見

戀を失うた者の歩む道——愛と認識との出發

隣人としての愛

隱遁の心持について

愛の二つの機能

過失——お絹さんへの手紙

善くならうとする祈り

他人に働きかける心持の根據に就いて



本道と外道

一七
 四三
 七三
 九六
 一一
 二六
 一三七
 一五〇
 一五八
 一六九
 一七八
 一九〇